



旭川市立春光台中学校

No. 115 (平成 25 年 11 月 1 日)

おもな内容

巻頭言	1
研修講座寸描	2
教育講演会概要	7
研究室だより	8
アンケート集計結果	9
開設 40 周年に寄せて	10
40 年間の歩み	12

「職業体験学習」2 学年職業体験学習の目的は、学習で得たものを手がかりとして自分の将来を見通し、今自分が中学校生活で何をすべきかを明らかにすることです。キャリアプランニング能力と自己理解・自己管理能力の育成を目指します。今年度は市内 30 か所の事業所が受け入れてくださいました。笑顔で帰校した生徒たちの顔には満足感が溢れていました。



開設四十周年に当たって

上川教育研修センター組合

組合長 西川 将人

上川教育研修センターが、今年度、開設四十周年を迎えますことは誠に喜ばしく、また、これまでの四十年の足跡を、上川教育研修センターだより「教育研修」に特集としてまとめ、その歴史を振り返ることは、今後の当研修センターの更なる充実・発展を期する上で誠に意義深いものと存じます。

振り返りますと上川教育研修センターは、上川管内の教職員の資質向上を図り、もって教育水準の向上を目指すため、日常の教育活動に生きる基礎的、実践的研修と研究の相互交流を計画的に進める教育機関として、上川管内すべての市町村の総意を結集して昭和四十八年に設立されました。

以来四十年間、教育研修と教育研究を事業の両輪として、教職員の研修と研究の中核的役割を果たし、管内の教育の充実に多大な成果を上げてまいりました。これもひとえに、構成市町村長をはじめ、各教育委員会並びに上川教育局など各関係の皆様深い御理解と御支援のおかげでここに厚く感謝申し上げます。厳しい経済情勢の昨今、行政の効率化が叫ばれる中、当研修センター組合のように、未来を担う子供たちのための広域的行政の執行体制は、北海道内でも特筆すべきものとなっております。また、国は、これまで幾度かの学習指導要領の改訂を行ってきましたが、現代

社会は、知識・技能が社会のあらゆる領域でますます重要となる知識基盤社会のただ中であって、各教育関係機関には、瞬時に情報が世界中に伝達される高度情報化やますます進展するグローバル化に対応できる国際感覚豊かで、たくましく生きる力を発揮できる人材を育成することが強く求められています。また、最近では、教育基本法、学校教育法などの関係法令の改正とも相まって、教育の果たす役割は、世界中でますます重要視されております。

このような状況の中、教育の質的向上が大きく問われており、学校や教職員に課せられた期待は大きく、当研修センターが果たすべき役割もますます重要になっていきます。そのため、上川管内の教育推進のテーマである「学び続け」かわり、高め合う「上川教育の躍動」の実現を目指し、学校・家庭・地域・各種関係機関が一体となって上川の教育を推進する必要があります。

このたびの開設四十周年を節目として、これからも上川教育研修センターが管内の教職員の研修・研究の中核的役割を担い、地域に根ざした教育活動推進の拠点となるよう心から祈念いたします。結びに、関係の皆様の一層の御支援と御協力をお願い申し上げます、巻頭の御挨拶といたします。



「開校百周年記念式典」今年、大正二年の開校より百年目の節目の年を迎えました。多いときで三百名を超える児童がいましたが、人口の減少により現在では全校児童十八名になりました。式典の中で十八名全員で心を一つにした太鼓演奏を披露したり、よさこいや「呼びかけ」を行ったりして、音威子府小学校の百歳のお祝いをしました。(音威子府村立音威子府小学校)

センター日記

- 7月9日 夏季拡大研究会議
  - 7月23日 教育委員会議
  - 7月25日～8月7日 研究室夏季集中研
  - 7月30日 道研連共同研究推進委員会
  - 8月9日 センター組合議会議運営委員会
  - 9月5・6日 センター組合議本会議
  - 11月1日 センターだより115号発行
- \*毎週火曜日 定例研究室会議

4 学校経営 I 6/12

講師 II

柳 良康 (前北海道教育大学 旭川校教職大学院 教授)

染木 圭男 (風連中央小 校長)

堤 明彦 (忠和小 校長)

本間 正彦 (永山南中 校長)



柳良康講師より、校長のリーダーシップ・組織マネジメントの活用・活力ある学校経営の推進等を御教授賜り、経営の原点、校長の自覚・姿勢を深く考えさせられた。提言や分科会では明日への経営実践につながる有意義な研修の場となった。(幌加内町立朱鞠内小学校 若林 徹)

研修講座寸描

その2

講座の様子から

5 学校経営 II 6/13

講師 II

村田 俊昭 (東川小 校長)

藤木 友善 (東神楽小 校長)

森 智春 (愛宕東小 校長)

中村日出元 (東光中 校長)



村田校長先生の講義では、教頭としてのあるべき姿をお示しいただき、協議では、教頭の職務の重要性や責任の重さを痛感し、大変有意義な研修となりました。また、中村校長先生のお話には感銘を受けました。ありがとうございました。(旭川市立新町小学校 鈴木 康弘)

1 特別支援教育② 6/14

講師 II

立田 祐子 (北海道立特別支援教育センター教育課的障害教育室 研究員)

山川 昌子 (永山南小 教諭)

萩野 里香 (忠和小 教諭)

佐藤 歩 (神楽中 教諭)



今年度より教員に採用され、特別支援学級を担当することになり右も左も分からぬ状態でしたが、講座で特別支援教育の実際、自立活動の内容と授業実践、卒業後の進路など特別支援教育について深く学びました。ありがとうございました。(旭川市立春光台中学校 松田 直樹)

6 読書活動 6/19

講師 II

甲斐信太郎 (知新小 教頭)

五十嵐 徹 (青雲小 教諭)



読書活動を充実させていくために、日常の授業の中で読書を楽しむ力をつけ、環境を整えていくことが大切だと分かりました。また、研究授業では子供が主体となつて読書活動を豊かにする方法を学びました。ありがとうございました。(旭川市立啓明小学校 武田麻衣子)

(3)

7 図工・美術科実技 6/28

南部 正人 (教育大 教授)  
渡邊 万紀 (六合中 教諭)  
講師



東 加奈絵

研究授業では、映像表現の面白さや読み取り方、映像を題材にした授業構成について学ぶことができました。講義では、映像について専門的な内容を、演習を通じてわかりやすく御指導いただき、大変ありがとうございました。  
(富良野市立富良野西中学校)



(旭川市立旭川第二小学校 松本 祐士)

8 複式教育 7/3

吉澤 重光 (聖和小 教頭)  
鈴木 徹也 (近文第二小 教諭)  
講師

個に応じた「わたり・ずらし」の工夫や同時間接指導の有効性など、初めて複式教育に関わる私にとって大変勉強になるものばかりでした。今後の実践に生かしていきます。わかりやすく丁寧に御指導いただき、ありがとうございます。  
(旭川市立旭川第二小学校 松本 祐士)

9 小学校外国語活動 7/4

丸山 健二 (東光小 教頭)  
太田 貴幸 (新町小 教諭)  
講師



(占冠村立占冠中央小学校 齋藤 陽樹)

すぐに授業で活用したくなるようなアクティビティ演習や、わかりやすい資料での御説明等、貴重な御指導をいただきありがとうございます。外国語活動で、目指す子供の姿に向かえるよう、指導計画や授業展開を工夫する大切さを改めて感じました。



(旭川市立愛宕東小学校 柳原 志展)

10 指導技術基礎 7/25

上田 祥司 (千代田小 教諭)  
常本 和幸 (朝日小 教諭)  
講師

学年・学級通信の意義や作成の要点、教室掲示による意図的学級経営、視聴覚機器の活用法等、様々な角度から指導法を学び、教員としての視野が広がりました。特に、タブレット端末の活用については、すぐに実践したいと思いました。



11 国際理解教育 7/25

大城 亮二 (風連中 教頭)  
 澤渡 千修 (当麻小 教諭)  
 松田 泰生 (北野小 教諭)

|| 講師 ||



自国の文化理解を深めるためには、他国への視点をもつこと、指導者は「世界の中の日本」を意識することが大切だとわかりました。どの教科、教材でも国際理解のエッセンスを入れることが可能なので、すぐ実践してみたいと思います。  
 (旭川市立忠和中学校 木村 智美)



小学校への滑らかな接続における、連携・交流の具体的な様子や実践の成果と課題について、小学校側、幼稚園・保育園側の双方の見方を知ることができ、とても勉強になりました。特に、子供同士の交流の機会と同じくらい教師間の意見交流の機会が大切だということに改めて学びました。豊富な資料で、分かりやすく御指導いただき、大変ありがとうございました。

(たいてせつ幼稚園 松井智恵子)

19 幼稚園教育 8/2

三浦 雅明 (つくし幼稚園 園長)  
 小野 茂樹 (近文小 主幹教諭)  
 三島 香織 (当麻幼稚園 主査 教諭)

|| 講師 ||

21 技術・家庭科実技 8/6

千葉 憲史 (広陵中 教頭)  
 西山 聖司 (緑が丘中 教諭)

|| 講師 ||



小・中・高での情報教育の現状を知ることができ、系統性を考えた指導の必要性を痛感しました。実技実習では、生徒のつまづきが予想される点を確認することができ、大変参考になりました。御指導いただき、ありがとうございます。  
 (富良野市立富良野東中学校 高山 篤志)



22 いじめ・不登校 8/7

柴田 康徳 (常盤中 教頭)  
 谷柿 憲治 (常盤中 教諭)

|| 講師 ||

いじめ・不登校の予防や対応について具体的な事例を基に講義、提言をしていただきました。特に、複数で一人の児童生徒を観察し、チームとして指導の方針や対応を考える重要性を学びました。御指導いただき、ありがとうございます。  
 (富良野小学校 柳澤 直樹)

(5)

24 音楽科実技 8/28

菅野 道雄 (教育大 教授)  
林 欽一 (西御料地小 教頭)  
鈴木 弘枝 (愛宕小 教諭)

講師



鑑賞の授業における評価方法やリコーダー指導など、多くの先生方の実践内容を交流することができました。また、低学年のうちからの「積み重ね」の大切さを改めて学びました。実技も大変勉強になりました。ありがとうございました。  
(旭川市立近文第二小学校 天方 美亜)



16 外国語科(英語)指導 7/31・8/29

笠原 究 (教育大 教授)  
小屋 聖子 (東陽中 教諭)  
齋藤 裕子 (啓北中 教諭)  
佐藤さおり (春光小 教諭)

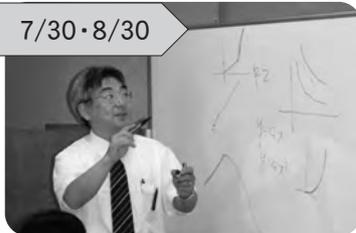
講師

外国語指導の道標となる研修でした。学習指導要領と実際の指導の在り方を、様々な角度から考えることができました。自分自身の今後の課題も分かりました。目今の生徒たちに還元できるように、研鑽を深めていきたいと思えます。  
(旭川市立神居東中学校 田村 隆幸)

14 算数・数学科指導 7/30・8/30

久保 良宏 (教育大 教授)  
武田 聡 (西神楽中 教頭)  
荒川美奈子 (神楽岡小 教諭)  
松田 光広 (広陵中 教諭)

講師



問題解決の授業について理解が深まりました。教材研究や定着問題に関する提言も参考になりました。研究授業では、一年生が進んで課題解決しようとする姿に感心しました。また、中学生の授業も興味深く参観させていただきました。  
(美深町立美深小学校 加藤 寿望)



15 理科指導 7/31・9/3

安藤 秀俊 (教育大 教授)  
樋口 雅裕 (大有小 教頭)  
長瀬 紋子 (緑新小 教諭)  
今野行太郎 (永山南中 教諭)

講師

生物の飼育方法や、理科と数学のつながりを重視した教材について、すぐに授業に取り入れられる内容のものを御指導いただきました。豊富な資料で、わかりやすく講義していただき大変ありがとうございました。  
(名寄市立名寄南小学校 北島あゆみ)

12 国語科指導 7/26・9/4

上田 祐二 (教育大 教授)  
 相馬美智枝 (北野小 教諭)  
 山内 恵美 (永山小 教諭)  
 工藤 丈 (緑が丘中 教諭)

講師



伝え合う力を育てるために、根拠—理由づけ—主張の三項関係が重要であること。「書くこと」の指導を充実するため、付けたい力を明確にして指導すべきことを学びました。受講生の質問にも丁寧に回答いただき、感謝申し上げます。  
 (名寄市立名寄南小学校 星野亜由美)



23 生活科・総合的な学習の時間 8/7・9/10

玉井 一行 (緑が丘小 教頭)  
 小坂橋一彦 (台場小 教諭)  
 伊藤さえ子 (神居東小 教諭)  
 上原 丈典 (明星中 教諭)

講師

総合的な学習の時間における理論と実践の両方を大変有意義に学ぶことができました。全体計画のたて方や評価の進め方などのわかりやすい御指導、また小学校と中学校の両方の授業参観という貴重な機会を有り難うございました。  
 (下川町立下川中学校 吉野 恵子)

25 書写実技 9/11

矢野 敏文 (教育大 教授)  
 大和 孝恵 (神居東小 教諭)

講師



動画や実物投影機を授業の要所で活用するなど、児童の学びやすさを重視した工夫を拝見しました。講義や実技では、授業づくりの基本や効果的な教材教具の使い方、指導方法を学びました。講師の先生方、御教示をいただき、ありがとうございました。  
 (上川町立上川中学校 西川 和美)



26 校内研修 9/13

長嶋 義和 (東町小 教頭)  
 矢作かおり (東町小 教諭)  
 増子 淳一 (東町小 教諭)

講師

校内研修における授業研究の手法や実践交流など、すぐに活用できる内容が多く、有意義な講座でした。特に模擬授業の大切さを改めて学ぶことができました。大変わかりやすく、実践的な講義をしていただき、ありがとうございました。  
 (名寄市立中名寄小学校 本田 達也)

## ● 上川教育研修センター開設四十周年記念教育講演会 ●

時 平成二十五年八月一日 於 旭川市大雪クリスタルホール

## 「これからの教育と学校・教師の役割」

講師 星槎大学大学院教授 上越教育大学名誉教授 新井 郁 男 氏



## 1 はじめに

江戸時代の庶民的な教育機関であった寺子屋では、一人一人教材が違う個別教育が行われていた。明治に入り、学校ができ、近代的な国家づくりの考えのもと、国民として必要な資質を一齐に教育する「学級」制度ができた。現在も様々な改訂を経て、進展してきているが、今、すべての教育は転換期（ターニングポイント）にある。

特別支援教育では、障がいにより一人一人のニーズに応じた教育を目指しているが、これからは、この考えをすべての

子供や大人に当てはめ、一人一人の違いに対応した教育を行っていかねければならない。

## 2 これからの教育

(1) 生涯学習の土台づくりの場としての学校

生涯学習は、一人一人が主体的に学習し、それが生涯続くという意味で望ましいことであり、重要なことである。そして、主体的な学習を促進させていくため、学校教育は、学習意欲を子供に培い、生涯にわたって学習を続ける土台作りの中心的な場とならなければならない。

(2) 土台づくりの四つの柱

ユネスコから出されたドローール報告によれば、生涯学習の柱として「知る」、「為す」、「共生」、「在る」の四つが示されている。すなわち、学習することで知識や人を知り、更に実践することで周りとともに生きることに繋がっていく。そして、人間としての存在を尊重しながら、本質的な豊かさを考えていくべきだとまとめている。

(3) 役割貢献度

生きがいのある人生かどうかの調査結

果をみると、家庭や職場、地域の中で、自分がどれだけ役に立っているかという意識（役割貢献度）の高さが生きがい感の高低に関係している。生きがい感の高い人は、青少年時代に周りから承認された経験を数多く持っている。このことから子供には、学校時代に様々な場面で認められ、褒められる体験が必要である。

## 3 知識基盤社会における教育の課題

(1) 知識、経験と体験

知識とは、個人が習得する対象であるが、教師が知識を習得させようと教育しても、子供は教師の意図通りに学んでいくとは限らない。どういう形で習得されていくかは個人の意思や考え方によるものであり、学ばないからといって「不十分」、「できない子供」という評価を下すことは考え直していく必要がある。

また、今の教育は体験が重視されている。経験は「その場限りで終わってしまうこと」と捉えることもできるが、経験が知識の習得と結びついていった時、次へとつながる「体験」に変わっていく。

(2) ICTによる教育

ICTを使いこなしていく教育は重要であるが、新しいメディアが出てくることによつていじめなどの問題が生じている。メディアリテラシーを単に「受信力（受ける側の力）」というだけでなく、自分から相手に発信していく力「発信力」という観点に立った新しいメディアリテラシーの育成が重要になっている。

## 4 学校の役割と課題

現在の学習指導要領では、すべての教科等を通じて言語活動を行うことになっ

ている。これは、言語力を身につけ、言語能力を形成することである。さらに、言語力育成のためには、日常生活で「挨拶をかわす」、「雑談力を身につける」等にも意味がある。

## 5 言語力の育成

イギリスの言語社会学者であるバジル・バーンステインによると、各家庭で身に付けている言語の力には違いがあり、それが学習成績の結果に影響を及ぼしているという。家庭内の話合いで役割を決めている個志向家族が使っている言語を「精密言語」、年齢・性別等の家庭のポジションで役割を決めている地位志向家族が使っている言語を「限定言語」と区別しているが、家庭内のポジションだけで役割を決めている家庭では、限定言語しか身に付けておらず、話合いをしながら役割を決めている家庭では精密言語も身に付けていて高い学力につながっている。

学校では、家庭とは違った役割分担があり、必要に応じてそれらを変更したり、話し合ったりすることで精密言語の使用が増える。また、教科横断的な指導によつても、精密言語の使用を増やすことができる。

## 6 おわりに

生涯学習の土台をつくる条件として、学習意欲を形成しておくことが重要である。そのためにも、子供自身が「自分ができる」と思えるように仕向けていくことが大切である。また、一人一人のニーズに応じながら、ゴールにとらわれることなく子供を教育していったほしい。

では、  
今、  
研究室

## 研究主題 学力の確実な育成を図る指導と評価の在り方 ～目標達成に向けた授業構築～

### 第15次研究 Q&A



アンケートの内容から目標の設定や評価についての質問等がありましたので、以下にお答えします。紀要（研究紀要第38号第15次研究2年次 平成25年3月）と併せてご覧いただき、児童生徒の学力の確実な育成に役立てていただきたいと思います。

Q 1



目標を設定するときには、何に気を付けるとよいのでしょうか？

**A** 身に付けさせなければならない知識・技能、考え方などの力について、重点化・焦点化を図り、目標を設定します。その上で、指導内容や学習課題、評価規準との関連を吟味し、それらの関係にズレはないか、抽象的な言葉になっていないか、再度内容の見直しを図ります。☞紀要p12～14



Q 2

単元を通して、1単位時間ごとに評価の観点をどのように絞って重点化するとよいのでしょうか？

**A** 教科や単元の指導計画の時数にもよりますが、児童生徒の思考の流れに沿って、バランスよく設定することが大切です。また、関心・意欲・態度や思考・判断・表現については、その時間だけではなく、単元を通して全体で見取ることが大切です。

☞旭川市教育委員会作成の学習評価シートの活用

Q 3

児童生徒全員を、どうやって評価するとよいのでしょうか？



**A** 一人一人が確実に学力を身に付けたかを確認するためには、1単位時間の評価観点を1～2つに重点化し、効率的に評価することが大切です。評価規準から、児童生徒の学習状況を見取ります。記述で見取る場合には、ノートや学習プリントなどを活用して、目標達成状況を把握します。また、観察で見取る場合には、児童生徒がどのような状況になっているか評価場面を複数回（自力解決場面やまとめの場面等）設けるなど、全員を見取るように工夫することが重要です。

Q 4

形成的評価や指導案の☆と★の違いについてどのようになっていますか？

**A** 形成的評価とは、学習指導過程の中で、児童生徒の学習の到達状況などを把握し、指導に生かすために行う評価です。指導案の☆は、学級の児童生徒への全体的な手立てを、★は、努力を要する児童生徒に対し、個別に具体的な手立てについて示しています。

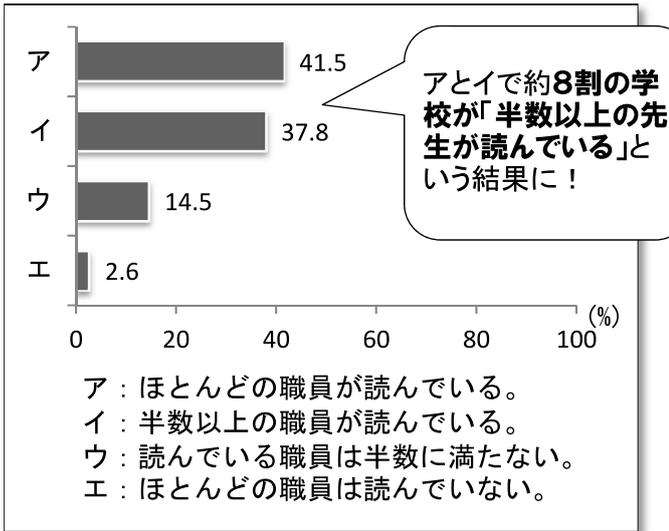
※学習指導では目標と指導と評価の一体化を図ることが大切です。

# 上川教育研修センターアンケート集計結果

6月の初めに、上川管内の全小中学校にアンケートを送らせていただきました。お忙しい中にもかかわらず、ほぼ100%の193校から回答をいただきました。大変ありがとうございました。

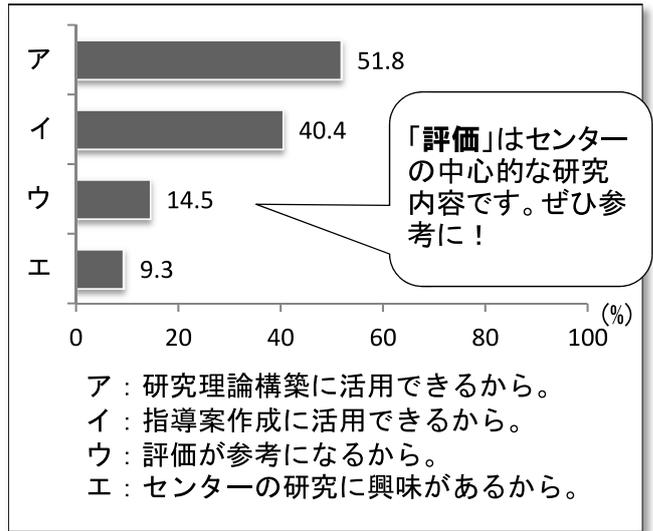
### 【設問①】

各校に『上川教育研修センター研究紀要第38号』を配付させていただきましたが、校内のどの程度の先生方が読んでいますか一つ選択してください。



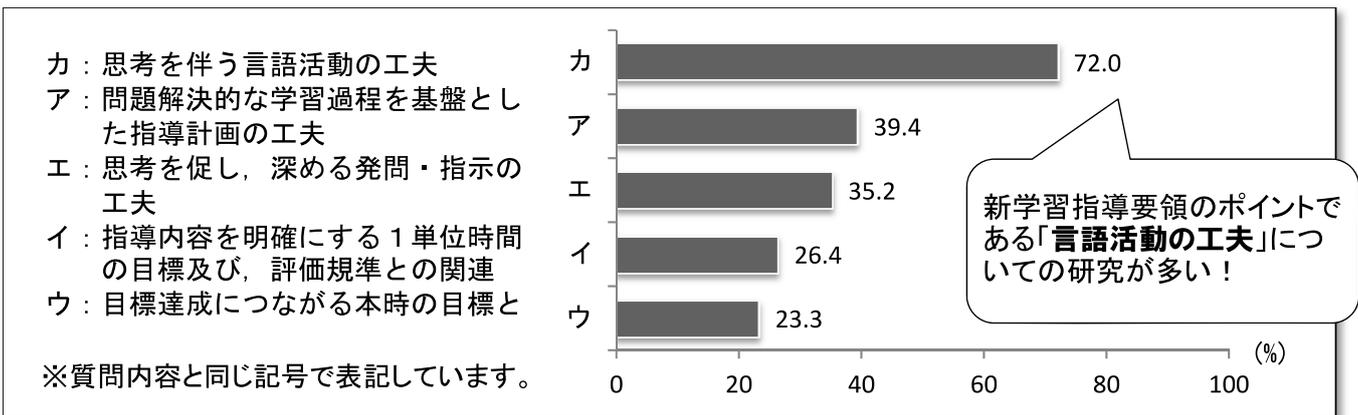
### 【設問②】

設問①で(ア・イ)を選択した方にお聞きします。理由を選択してください。(複数回答)



今年度センターでは、第15次研究に「学力の確実な育成を図る指導と評価の在り方」を研究主題とし、「目標と指導と評価の一体化」を図る工夫について研究を進めてまいりましたが、多くの学校に参考にしていただけるよう、より分かりやすい研究内容を工夫していく必要があると考えています。

【設問③】 貴校の校内研究において、特に重点を置いている(予定含む)研究内容があれば、3つ以内で○を付けてください。(詳しくは上川教育研修センター研究紀要第38号参照)



各校で、重点を置いている研究では、「言語活動の工夫」が70%を超える結果となりました。また、「問題解決的な学習過程を基盤とした指導計画の工夫」についても、一定程度浸透してきていることが分かります。

【設問④】 今後、センター研究室に対して取り組んでほしい研究内容や要望があれば記述してください。

「教科」に関する意見が多く、特に「言語活動」や「学習評価の工夫」についてご意見をいただきました。他には「日常の授業にすぐ実践できる内容」というものもありました。今後も、より分かりやすい研究内容、そしてより使いやすい紀要を作成していきたいと思っております。

# 上川教育研修センター開設四十周年に当たって



上川教育研修センター組合議会議長  
美瑛町長 浜田 哲

上川教育研修センターが開設四十周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

顧みますれば、当センターが設立された昭和四十年代後半は、我が国においては、高度経済成長後の経済・社会活動の複雑・高度化に伴い、必要とされた知識量の増大を、学校教育の質を上げることでの対応が図られた時代でありました。そのような中、当センターは、管内の市町村が共同して行う教職員の研修並びに研修に関する調査研究を実施するための教育機関として設置されました。

このような時代背景のもと、当センターは、今日までの四十年の長きにわたり、設立の趣旨に基づき、教育研究・研修の諸事業を計画的に推進し、教職員の資質の向上を図り、上川の子供たちの質の高い教育の提供に寄与してきたところであります。

今日、グローバル化や知的基盤社会の到来、少子高齢化の進展など、社会が急速な変化を遂げており、教育の重要性はますます高まっています。このように社会の激しい変動や学校教育が抱える課題の複雑・多様化等の中で、教員に対する揺るぎない信頼を確立し、力ある教員を養成するためには、先進的な教育研究や教職員研修の中心拠点として、当センターの役割はますます重要なものとなってきており、管内の市町村連携のもと現場で頑張る教職員をしっかりと支援し、教育現場の活性化が図られることをなお一層期待するものであります。

開設四十周年を契機として、当センターの更なる充実・発展を期待するとともに、関係各位の御健康、御多幸を心より御祈念申し上げます。

# 上川教育研修センター開設四十周年に当たって



上川教育研修センター組合教育委員  
中富良野町教育委員会教育長 松藤 藤吉

上川教育研修センターが開設四十周年を迎え、新たな一歩を踏み出すことができましたことは、関係者各位の深い御理解と御支援のたまものであり、心から敬意と感謝を表したいと存じます。

当センターは、昭和四十八年、多くの期待と注目のもと事業が開始されました。以後、教育の今日的課題や動向を受け、各学校や教職員の意見や要望を取り入れ、研修講座内容の改善・充実にも努めてまいりました。今年度も、今求められている教育の実現に向けて研究事業の推進にあたり返つてみますと、教育三法等の特にこの十年を振り返るところです。

改正、新学習指導要領の全面実施等、大きな節目にあつてきました。さらに北海道をあげて取り組まれていた学力向上は上川管内、各学校、教職員にとつても共通の課題であります。上川の子どもたちの課題も、学習習慣、基礎学力の定着、学習時間の確保、生活リズムの確立などが明らかになっております。家庭との連携が一層求められることはもちろんですが、学力の基礎となる学校での取組の中心は授業改善であり、わかる授業、楽しい授業の展開、発展であります。これらは、当センターにとつても事業の大きな柱であることはいまうまでもありません。

一例をあげれば、現在第十五次三か年研究計画の中で、「学力の確実な定着を図る指導と評価の在り方」をテーマに、新しい教育課題の研究を精力的に進めております。こうした事業をとおして、日々の教育活動を担う教職員一人一人の力量や意識の向上が図られることが当センターの大きな役割であると考えております。

これからも四十年の実績と伝統を基盤にして、新しい教育の実現に向けて、地道な研究・運営に取り組み、上川教育の充実・発展に全力を傾けてまいりたいと存じます。

終わりになりますが、開設四十年を節目として当センターの研修・研究事業が上川の教育向上に貢献するとともに、利用される教職員の熱意ある研修と御協力、さらに関係各位の御指導、御助言をお願い申し上げます。

# 四十年の歩みを重ねて



上川教育研修センター組合教育委員会  
前委員長 山下 善彦

平成十年、当時開設二十五周年を迎え、教育講演会のホテルでの開催、懸案の改修計画などが石崎所長の下で進められておりました。副所長として加わった私は、所員、事務局員と経緯の整理やこの機会に出来ることは何かと論議しました。研修センターがより身近で、より存在感のあるものにとの願いからでした。その結果、研修事業では、三つのことが十一年度の要項に盛り込まれました。一つは、構成市町村の標準を入れたこと。二つには、講座の特徴を端的に表すキャラクターをつけたこと。三つには、過去と実績を踏まえ、未来につなげる意味で、「試そう……」創ろう……「生かそう……」の合言葉を作ったことです。研究事業では、少しでも早い内容の理解と活用を図りたいとの思いから発表会を年度内に持たないかと模索しました。

平成十三年から、センター組合教育委員会委員としてかわるることになり、事態の急変に戸惑うばかりでした。委員の方々は、各自自治体で多様な経験をされておられ、センターだよりの「随想」に見られる如く、それぞれ独自の知見を持ち、幅広く、多角的な意見の交換がありました。センターのハード、ソフト面にとどまらず、上川管内全体の状況、各地域にある課題、そしてわがまちの実態などでした。研修講座では、理論編と実践編を分離した設定や出前講座などに関心があがり、研究事業では、各学校での活用、浸透状況が話題になつておりました。少子化の状況から研修体制に苦勞があり、センターと地域の研究団体との連携を密にの切なる願いもありました。

示唆に富む充実した十四年余りに感謝するところで。今、教育にかかわる課題が多く指摘され、いろいろな提言、要請がなされています。上川教育研修センターがこれまで蓄えてきた貴重な実績や多方面とのネットワークを生かし、更に発展されるよう祈念します。

## 「学び続ける教師」の確立を目指して



上川教育研修センター組合教育委員会  
前教育長 鳥本弘昭

今日、グローバル化、情報化の進展、あるいは、いじめの深刻化等々、学校をめぐる課題が社会の変化の中で増大している。

これらの状況を踏まえて、昨年、中教審から「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」という答申が出された。

社会の急速な進展の中で知識・技能が陳腐化しないよう絶えざる研修が必要であり、「学び続ける教師像」を確立すると述べられている。

「師弟同行」という言葉もある通り、学び続ける教師でなくては、教えることもできないのは当然である。

「学び続けること」即ち「研修」である。

「研修」とは言うまでもなく研究と修養である。研究は勿論大切なことではあるが、どちらかと言うと修養という面が疎かになってきたことは否めない。学問を修め、徳を磨き、人格を高めるよう努めることを修養というと辞書にある。急速に進展する時代にあつて「修」の面が教師として益々必要にもなつてくると思われる。

この四十年間、歴代の極めて優秀な所長、副所長をはじめとするスタッフの皆さんにより、当センターは上川教育の屋台骨を支えてきた。

毎年千名を超える教師がセンターの講座を受講し多くの成果を各学校に持ち帰つて子どもたちの教育にあつてきた。

まさに「学び続ける教師」を支えてきたといつて過言ではない。

四十周年を節目として「修」の面にも講座を拡げ、一層の充実を図られることを期待している。

## 上川教育研修センター開設四十周年に当たって

## 開設四十周年に思う



上川教育研修センター  
元所長 三浦直昭

上川管内の小中学校教職員の資質向上を図るために立ち上げられた上川教育研修センターの開設四十周年。社会の大きな変動や教育改革の波に揉まれながらも、子供たちの力をつけるためには、教師が力をつけなければならぬという信念で、教育研修センターがその一翼を担ってきた。

私が入所したのは、平成十六年。副所長としての二年間は平沢所長と、所長としての一年間は安藤副所長と勤務。非力な私を陰で支えてくれた職員、スタッフの皆さんのおかげで、ご迷惑をかけたながらも勤務できたことに感謝するとともに、多くのことを学ばせて頂いた。

前年に節目の開設三十周年を終えたばかりで、さらに充実、発展していく勢いが見られた。市町村の合併が取り沙汰されている中で、その動向を見つめながら運営に当たつた。センター組合事務局、旭川市をはじめ各市町村の理事者で作られるセンター組合議会の力強い後押しとご理解、ご協力があった。

完全学校週五日制が定着し、校外研修への参加が厳しい状態の声を聞けなかつた実情調査として、初めての管内教職員全員のアンケート実施。指導員が中心となつて深夜に及びながら分析した。結果、長期休業中の講座回数を増やし、二日間の講座を長期休業中と授業日に分割開催。センターから各学校へと出前講座の開設。文化講座の開設。研究員の教科講座参加で研究内容の啓蒙を図る。HPの更新充実など様々なアイデアを生み出してくれた。

また、講師を引き受けてくれた先生方、上川教育局、市教委、道研を始め多くの関係機関のご協力があった。どのような社会情勢の中でも、研修センターは教職員の更なる資質向上を図り、子供たちの願いや力を届けるための、教職員の拠り所として発展することを願つていく。

## 四十周年おめでとうございます



上川教育研修センター  
元研究事業部長 福家 尚

私は、平成十一、十三年度研究員として、平成十七、十八年度研究事業部長としてお世話になりました。研究員の時代は、自校においては学級担任・研究部長であり、俗に言う二足のわらじを履く立場に、最初は戸惑いもありましたが、仲間の研究員と、とことん議論し追究できる火曜日の午後が、待ち遠しい時間になつていきました。

授業研や研究紀要作成時期になると、研究室会議は定例以外にも多く設定します。しかも夜遅くまで話し合うので、研究員と一緒に過ごす時間がとても多くなりました。自校の職員より親密な関係になつていたかもしれません。

研究事業部長としての二年間は、研究室に優れた力をもつ研究員が揃つているので、指導助言などおこがましいと思つていました。研究員一人一人によさや持ち味を發揮してもらつたこと、仕事をしやすい環境をつくることに気を遣いました。

所員としての五年間で、道研連での活動を通して、全道の先生方と情報交流できたこと、教育行政の方々とお付き合いになつて御指導いただいたこと、そして、管内各校で活躍している先生方に出会えたことは、私にとつてかけがえのない財産となつていきます。

尊敬する歴代のセンター所長、副所長の皆様は、いつも教育観や学校経営の在り方について熱く語つてくださいました。その時間かせていただいた教育理念を今、現場で生かせるよう努力しております。

プライベートの場面では、研究員の頃、K部長時代に飲み会を数多く設定し、焼き肉やカラオケ対決をしたことなど、忘れられない思い出もあります。四十周年を迎え、今後も上川教育研修センターが管内教育を力強く推進していくことをお祈り申し上げます。お祝いの言葉といたします。

# 上川教育研修センター 四十年の歩み

## 研修事業

第一次（昭和四十八〜昭和五十年）

「上川管内三二〇〇名の

教職員の熱い期待を担って」

上川教育振興会総会で、上川管内の教職員の資質の向上を図るため、教職員研修センターを設立しようという機運が高まり、昭和四十二年九月に発起人会が発足された。

その後、特別委員会、準備委員会の設置、関係市町村議会等を経て、昭和四十七年八月、道知事に組合設立許可申請を行い、同年九月に認可。道内四番目の教育研修センターが誕生した。

昭和四十七年十一月一日着工、昭和四十八年六月三十日竣工の後、同年七月二十七日に開所式が行われた。その三日後から、第一次研修事業の研修講座がスタートした。記念すべき最初の講座は「新任校長研修会」であった。初年度は、九百名の受講数を予定して三十二講座が実施された。

開設一周年を迎えた昭和四十九年七月末には、研修講座参加者は千二百名を超えた。また、教育関係者の各種研究サークル、自主研修、その他一般を含めた施設利用者は延べ三万名を超えた。

第二次（昭和五十一〜昭和五十三年）  
「試練を乗り越え  
一層の充実を期して」

昭和五十一年には、教育相談室が開設され、「学習内容」「生徒指導」等について、相談の窓口となった。また、同年、教育研究資料室が開設された。

昭和五十二年は教育界が混迷を極めた時期で、実際に開設できたのは二十四講座で、翌年も二十五講座にとどまった。

昭和 51年  
「小学校理科実技」講座



一つの実験に受講者が皆で注目している様子。

昭和 53年  
「小学校音楽実技」講座



初心者向き講座の様子。ソプラノのドイツ式G・リコーダー実技。

第三次（昭和五十四〜昭和五十六年）  
「組織の充実で新たな飛躍を」

昭和五十四年には、研修事業について、三年間を一区切りとして同内容で年々対象者を変えていく講座、領域や対象学年を変えていく講座等、大幅な見直しを行った。

昭和五十五年は、教育の今日的課題を踏まえた教育講演会を三回開催し、延べ五百名が参加した。

昭和 55年  
「道徳教育指導」講座



この時代、ほとんどの学校が暖房に石炭ストーブを使用していた。

昭和五十六年には、研修室に加えて研究室が設置され、各学校に対して実施した「研究推進にかかわる調査」の結果を分析検討し、研究事業がスタートした。

同年度には研究紀要が第三号まで作成された。研究主題は、それぞれ「通知票に関する研究」「創意を生かした特別な活動（の時間）に関する研究」「生徒指導に関する基礎的研究」であった。

第四次（昭和五十七〜昭和五十九年）  
「開かれた研修センターを求めて」

昭和五十七年は、センター運営の重点を「親しまれるセンター」「喜ばれるセンター」「信頼されるセンター」の三点においた。

昭和 57年  
「造形実技」講座



板画の実習を青少年科学館で行った。

センター開設十周年を迎えた昭和五十八年には、記念事業として、初めての移動講座を富良野市と士別市で開催した。

10周年記念行事  
（仁宇布小中を招待して）



「ギャラリー關」が食堂だったころの様子。

昭和五十九年は、前年の開催地に美深町と南富良野町を加え、移動講座を四地区に拡大した。また、「教育現代講座プログラム」と称して、即実践につながる教養講座を、半日日程で五回実施した。

第五次（昭和六十〇昭和六十二年）  
「日常実践に直結する  
研修を目指して」

昭和六十年には、「学校経営Ⅰ」「学校経営Ⅱ」「教育課程」「教育相談」の四講座において宿泊交流が行われた。また、「特別活動の充実に関する研究」を研究主題とした研究紀要第九号が作成された。

昭和60年  
研究室会議



研究員7名が白熱した議論を  
交わす。

昭和六十一年、情報化社会の到来により特別講座として開設した「パソコン」講座には希望者が殺到した。また、同じく特別講座の「書の基本と心」には、教育学名誉教授の赤石先生を講師としてお招きした。

昭和六十二年の「国際理解」特別講座では、旭川在住の外国人三人を招いてのパネルディスカッションを行った。

昭和62年  
「社会科指導」講座



足踏み式脱穀機を  
使っての体験学習。

第六次（昭和六十三〜平成二年）  
「実践力を高める  
豊かな研修の場を求めて」

昭和六十三年は、親の役割である「親業」の考え方や手法を基に、教師と子どもとの対立や問題を解消し、望ましい人間関係をつくるための方策を研修しようとして開設した特別講座「教師学」が好評。夏季休業と冬季休業を利用した前後期日程の中で、教師学の理論と実践化の方法について説明と演習を行った。

平成元年には、旭川北都商業高校のパソコン室をお借りしての「パソコン」講座が実現。一人一台のパソコン使用が可能となり、四名の講師と補助の先生による、行き届いた個別指導が行われた。翌平成二年には、旭川工業高校にも協力をいただいた。

研究事業としては、昭和六十三年からの三年間、「個が生きる学習指導の研究」を研究主題とした研究紀要が作成された。

平成2年  
「パソコン実技」講座



旭川工業高校でベーシックプログラムの  
基本を学ぶ受講生。

第七次（平成三〜平成五年）  
「個性・創造性を伸ばす  
教育活動の推進を求めて」

平成三年には、組織の見直しが行われ、副所長の兼務となっていた研修・研究部長制が分化し、専任の研究部長が置かれた。さらに指導員が一名増の三人体制となった。

平成四年の特別講座「学校劇」は、秋の学芸会に向けての準備が始まる時期の開催で多くの受講者があった。

開設二十周年を迎えた平成五年には、副所長が兼務していた研修事業部長職に専任を置いた。またこの年の十月、道研連大会及び全国教育研究所連盟研究協議会を旭川で開催した。施設面では、駐車場の整備が行われた。

全国教育研究所連盟  
研究協議会



全国の教育研究機関の代表  
者が集い研鑽を深めた。

平成5年  
「英語科指導」講座



外国人講師（当時のAET）  
を迎えての演習。

第八次（平成六〜平成八年）  
「今日的な課題に  
実践交流の深まりを求めて」

平成六年には、国語、社会、算数・数学、理科の教科指導講座において、各学校、個人の実践交流に力点をおくべく、学校種別開催とした。

平成6年  
「中学校国語科指導」講座



音声言語及び文字言語による  
理解力を育てるための指  
導の在り方をさぐる。

平成七年の「今日的な教育課題」講座に関心が集まり、多くの受講者が参加した。また、この年から、移動講座の開催を二地区とした。施設面では、三階の和室が資料室に改修された。

平成八年には、他機関から十名の専門家を講師として招いた。また、受講者全員のレポート持参義務を廃止し、センターから数名に依頼するというように参加形態を変更した。

平成8年度  
センター研究発表会



第8次研究の成果と第9  
次へ向けての報告。

平成 11 年  
「教育相談」講座



教育相談の理論を学び実際に演習を行った。

平成十年には、開設二十五周年を記念して、東京家政学院大学の河野重男学長を講師に招き、教育講演会を開催した。平成十一年、九月から十一月にかけて、センター施設の大規模な改修工事が行われた。そのため、この間の講座は学校を会場にして実施させていただいた。各学校とも、大変きめ細やかな心配りをしていた。

平成 9 年  
「家庭科実技」講座



「エプロンやカバーの制作と子供のアイデアを生かす工夫」と題した実技。

平成九年は、「社会教育」講座において、大雪クリスタルホール、博物館、東光中の視察研修、「生活科指導」講座においては、常磐公園のマップづくりを取り入れる等、各講座で多彩な研修が進められた。

第九次（平成九〜平成十二年）  
「豊かな教養と実践的な指導力の向上を目指して」

研修内容に授業参観を望む多くの声に応え、平成十四年は、二十五の講座に授業を取り入れた。

平成 13 年  
「生活科指導」講座



「主体的な活動を促す環境構成、指導計画の工夫」と題した提言の様子。

また、この年からいくつかの講座において公開講座を設定した。平成十三年の教育講演会には、千葉大学の天笠茂氏を講師にお招きした。新教育課程の完全実施を翌年に控えており、幅広く教育課題にふれ、示唆を与えていただいた。

平成 12 年  
「体育実技」講座



体づくり運動の実技に取り組む受講生。

平成十二年、新設された「総合的な学習（小・中）」講座に、道研から講師を招いた。予想を超える七十名近くの受講者が集まり、活発な意見交流が行われた。

第十次（平成十二〜平成十四年）  
「教育改革のねらいを的確にとらえ課題に直結した研修を」

平成十六年は、外部講師の拡充、小中交流授業の実施など、教育課程の編成と指導実践に生かされる内容となるよう、講座を工夫した。

平成 15 年  
「生徒指導」講座



向陵小学校での授業。児童、生徒理解の在り方について研修する。

平成 15 年  
「学習指導基礎」講座



板書やノート指導、発問や指名の仕方などの基礎的な指導方法について学ぶ。

平成十五年は、新教育課程に対応した講座を実施する等、教育の今日的課題を積極的に取り入れた。また、講座内容の充実と実践交流の深まりを期して小中学校別講座を設け、少人数化を図った。

第十一次（平成十五〜平成十七年）  
「教育改革の定着を期して 体験型研修の充実を」

平成 17 年  
「小学校理科指導」講座



道立理科教育センター研究員を招いて、実習が行われた。

平成 17 年  
「音楽実技」講座



春光小学校を会場に、発声指導と指揮法の研修が行われた。

平成十七年には、音威子府村において「特別活動」、上富良野町において「教育課程」の移動講座を開設した。

平成 16 年  
「社会科指導」講座



旭川第 2 中学校での社会科の授業。問題解決的な学習を重視した指導の工夫。

平成 16 年  
「特殊教育」講座



特殊教育センターより講師を招いて特別支援に向けての校内体制の在り方について学ぶ。

第十二次(平成十八〜平成二十年)  
「各学校のニーズに  
応える講座を目指して」

平成十八年、教職員の教養を高める  
「文化講座」、各学校の要請に応じる「出  
前講座」を新設した。

平成 18 年  
「出前講座」



下川小学校で特別支援教育についての講座を開催。

平成 18 年  
「情報教育」講座



旭川第 3 小学校で、ホワイトボードとパワーポイントを使った算数の授業が行われた。

平成十九年は、受講者が参加しやすい体制を整えるため、長期休業中の開催を多くするとともに、教科指導では理論編と実践編とを分離開催するなど工夫した。

平成 19 年  
「読書活動」講座



児童生徒の主体的な読書活動の推進に向け、話し合いが行われた。

平成 19 年  
「自然探索」講座



嵐山の北邦野草園で野草を観察。

平成二十年の講座では、小中の一層の連携を深めるため、基本的には小中合同で開催するとともに、授業参観を多く取り入れた。

平成 20 年  
「複式教育」講座



美進小学校 1 年・2 年「算数科」の授業。

平成 20 年  
「書に親しもう」講座



冬休み中に開催された文化講座。毛筆作品も制作。

第十三次(平成二十一〜平成二十三年)  
「今日的な教育課題の  
解決を目指して」

平成二十一年は、前年度に実施したアンケート調査の結果を踏まえ、講座の内容や時期、形態などについて見直して、三か年計画をスタートさせた。

平成 21 年  
「動物たちと行動展示」講座



旭山動物園で飼育員の方から動物の特性などについて学ぶ。

平成 21 年「ミニ道研」  
(情報モラル教育)



今後の情報モラル教育推進に向けた取組について熱心に話し合った。

平成二十二年の教育講演会では、放送大学客員教授の西川公司氏に「特別支援教育の今日的課題」と題して講話をいただき、多くの示唆を得た。

平成 22 年  
「国語科指導」講座



東明中 3 年「国語科」の授業。編集した記事を推敲していく。

平成 22 年  
「小学校外国語活動」講座



北光小 6 年生の授業。「できることを紹介しよう」

平成二十三年は、それまでの計画と同様に各大学との連携を図るなどして外部講師の充実に努めた。

平成 23 年  
「国際理解教育」講座



国際理解教育におけるアクティビティの紹介。

平成 23 年  
所員研



東聖小「社会科」の授業。所員が授業を公開し、研究推進への理解を図る。

平成 24 年  
「学級経営」講座



子供一人一人を大切にした西御料地小 6 年「国語科」の授業。

平成 24 年  
「社会教育」講座



学校・家庭・地域の実情交流では、活発な話し合いが行われた。

平成二十四年には、文化講座として「絵に親しもう」を新設した。また、小・中学校共に学習指導要領が全面实施される中、教育講演会には、公立中学校で教師の経験をもつ大阪教育大学の野口克海氏を講師にお招きした。施設面では、第一研修室に冷房設備を完備した。

第十四次（平成二十四年）  
「喫緊の課題やニーズに  
対応するために」

最近十年間の研究主題・研究協力校

○平成十五～平成十六年

「自ら学ぶ力を高める指導と評価の在り方」

- 北野小・聖和小・和寒中
- 光陽中・大町小・台場小
- 当麻中・神居中

○平成十七～平成十九年

「確かな学力をはぐくむ学習指導の在り方」

- 東川小・比布中央小・常盤中
- 永山南中・朝日小・新富小
- 鷹栖中・東光中・青雲小
- 近文小・春光小・神楽中

○平成二十～平成二十二年

「思考力・判断力・表現力等をはぐくむ学習指導の在り方」

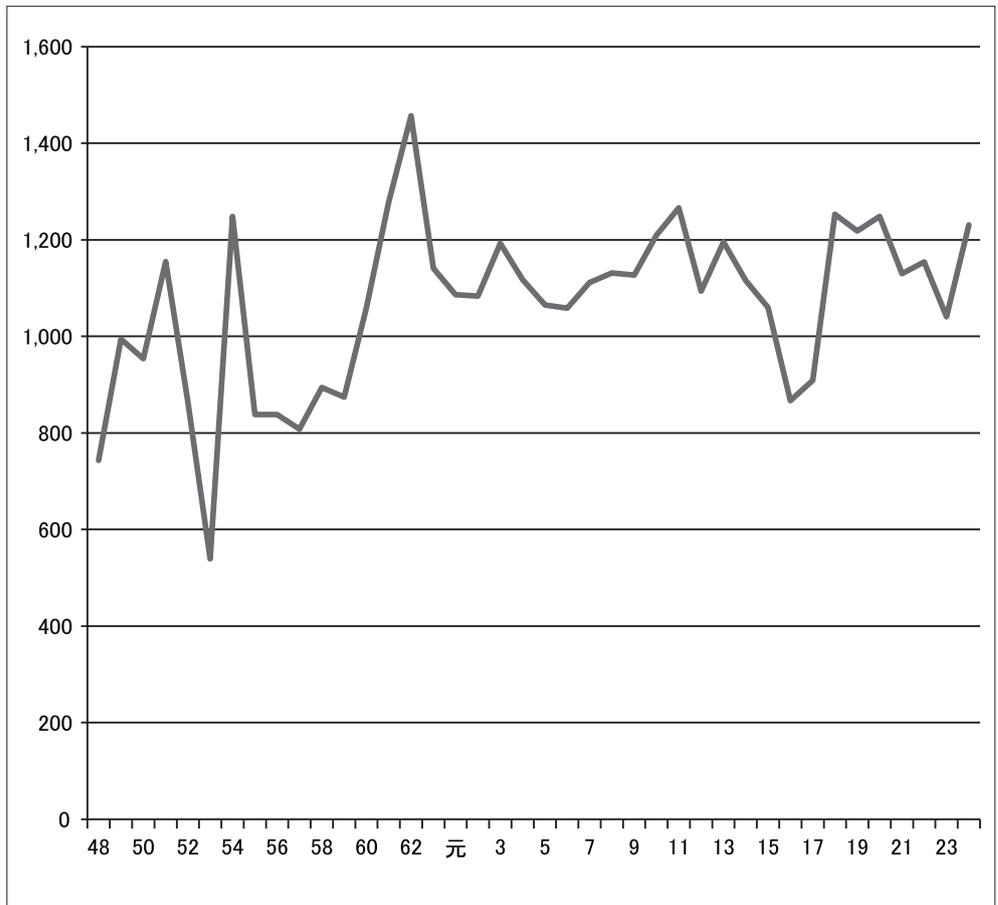
- 春光小・東五条小・永山小
- 永山西小・北星中・向陵小
- 北都中・新町小・鷹栖小
- 啓北中・東明中

○平成二十三年

「学力の確実な育成を図る指導と評価の在り方」

- 正和小・知新小・緑が丘小
- 愛宕中・当麻小・青雲小
- 永山小・北都中

研修講座受講者数の推移



ここまでの四十年間の歩みを振り返ってきた。これまでの実績を踏まえ、今後も、各学校の教育実践に役立てられるよう、研修事業・研究事業を充実させていきたい。

発行日 平成二十五年十一月一日  
発行所 上川教育研修センター  
〒077-0036 旭川市六条通四丁目  
電話 0116-242501  
責任者 鷺見正雄  
印刷所 株式会社あいわプリント

※この用紙は再生紙（古紙70%）を使用しています。